

# 草庵仏教

第172号  
(発行日)  
2004年10月1日  
発行所：真宗大谷派念佛寺  
〒6638113 西宮市  
甲子園口2丁目7-20  
電話・FAX (0798)  
63-4488  
(発行人) 土井紀明  
メール: kimyou4@yahoo.co.jp  
http://www.eonet.ne.jp/~souan

## 《 聞法会ご案内 》

- 〈同朋の会〉  
毎月22日午後2時  
.....
- 〈念仏座談会〉  
第1土曜日午後3時  
第3土曜日午後3時  
\* 8月の〈同朋の会〉及び  
第3土曜日の念仏会は休み。

## 真宗問答④ 法蔵菩薩について

B 「前号で、如来法蔵様は私たちが仏になる因を、私たちのために、私たちに代わって修行して仕上げ、それを南無阿彌陀仏として、私たちに与えてくださる、そういうお話でした」

D 「南無阿彌陀仏の(いわれ)の話ですね」

B 「その(いわれ)はどこに示されているのですか」

D 「仏説無量寿経です。このなかの、法蔵菩薩の発願・修行・成就・回向という教説が南無阿彌陀仏のいわれなのです」

B 「法蔵菩薩の発願と修行の話ですが、法蔵菩薩とはどんなお方ですか」

D 「単なる人間ではなく、従果向因の菩薩といわれています」

B 「従果向因とは」

D 「果より因に向かうということとで、もと仏(果位)であるお方が衆生済度のために菩薩(因位)の姿をとられた、法蔵菩薩はそういう菩薩です。法蔵という名にもそれが表されています」

B 「法蔵の名とは」

D 「法はダルマで、真理のこと。蔵はアーカラでくらのこと。蔵に宝が納まっているとともに、

そこから宝が取り出される、そういう蔵のごとく、真理(法)がそこに収まっております、そこから法が出てくる、そういう名の菩薩ですから、もはや人間の名ではない、真実そのものの働きの名といえましょう」

B 「法蔵菩薩がそこから現れてきたという本の仏とは」

D 「いろいろなく形もましまさぬ仏といわれ、法性法身とか法身仏といわれています」

B 「法身仏とはどんな仏ですか」

D 「その本質は寿命無量、光明無量の徳と私は聞かせていただいています。はかり無きいのちでありつつ、はかり無き光明すなわちさとり智慧の徳を本性としていたる仏でありましょう。ただ、寿命とか智慧という言葉で限定することすらできない無限定の仏といわれています」

B 「その法身仏から法蔵菩薩として形をあらわされたというところで、なぜ法蔵菩薩として現れて一切衆生を救おうという願いを起し、菩薩の修行をされたのでしょうか」

D 「法身仏の智慧は、一切衆生を自他一如と覚っている大いな

るさとり智慧といわれています」

B 「自他一如のさとり智慧とは」

D 「一切衆生をご自身のいのちの内容とし、一切衆生の苦しみをご自身と一つに共感する仏の智慧です。無量の智慧は同時に無量の慈悲として、そこから一切衆生を救いたいと現れ出てくださったのが法蔵菩薩です。それを曇鸞大師は

法性法身に由つて方便法身を生ず(浄土論註)

といわれています。法性法身(法身仏)から法蔵菩薩となり、願行成就して阿彌陀仏(南無阿彌陀仏)となられた、そこで阿彌陀仏を方便法身というのです」

B 「法蔵菩薩として現れて下さり、本願を起し、修行して、私たちが救う阿彌陀仏(南無阿彌陀仏)になられたというお話ですが、そういう出来事はいつどこで起こったのですか」

D 「無量寿経に説かれている法蔵菩薩の願行の話は歴史的史実ではありません。徳川家康がいつどこで何をしたとか、ナポレオンが何年に何をしたとか、そういう歴史上の事象ではないのです」

B 「歴史的史実ではないとしたら、まったくのおとぎ話ですか」

D 「歴史的史実ではないけれど、歴史を貫いて働いている永遠の

真実です」

**念仏座談会**  
**《 変更のお知らせ 》**  
11月6日→→11月2日  
11月20日→→11月12日  
上記のように念仏座談会の日を変更いたします。

B 「大化の改新であるとか、ローマ帝国の成立だとかいう歴史的な事実はないけれども、いつの時代の全歴史の中に働き続けている真実なのですね」

D 「そのようにお聞かせいただいています。その真実を真宗では阿彌陀仏の本願力といえます。その本願力のまこと、それをいかに衆生に知らせ、衆生に受け取られ、衆生の救いとするかという時、その真実は釈迦仏によって、法蔵菩薩が願行成就して阿彌陀仏になられた物語として説かれたのでありましょう」

B 「法蔵菩薩の物語は単なる昔話とかおとぎ話ではなくて、全歴史を貫いている真実が背景になっている物語なのですね」

D 「そうです」

B 「無量寿経を読みますと、それこそ(むかしむかし、あるところに国王がいて、世自在王仏

の説法を聞いて感動し、国の財も位も捨てて、法蔵菩薩になられた」というように「どこでどうした」という物語的なスタイルになつていますね」

D 「ええそれは、私たち凡夫に受容できるように表現されて説かれていのでしょうか。私たち凡夫は、（いつどこでどうしてどうなつた）というように、空間的、また時間的に、そして因果的に説かれたいと受け取ることが難しいのです。因果的な物語で説かれてやつと凡夫の心に受け取られてくるのです。もし、その真実が般若心経のように、

「色即是空・空即是色」というようなもののズバリの表現ですと、優れた知恵者なら分かるとしても、おろかな凡夫には受け取ることが大変難しいことになりす」

B 「さつき昔話といわれましたが、「花咲じいさん」にしても「カチカチ山」にしても、そういう昔話は事実ではないでしょうが、それを聞く私たちは何が善であり何が悪であるかを自然に理解できるようになりますね。ウソは悪で正直は善という箇条書きの教訓のような抽象的な話ではなかなか実感として分かりにくいけれども、日本の昔話のように説話や物語ですと実感的に胸に響いてきます」

D 「そうなんです。物語や説話で真実が表現されてはじめて、それを聞く私たちがその真実に

ふれ、ついにはその真実を信受するに至るのです。なぜならその真実は冷たい道理といったようなものでなくて衆生への大いなる慈悲だからです。法蔵菩薩の物語は私たちを救わずにはおかないという仏の大慈大悲の心から表れ出た驚嘆すべき説話といつていいでしょう」

B 「真実は大悲の真実でありそれを表わす慈悲深いいわれ、それが法蔵菩薩の説話なのです」

D 「20世紀でもっとも偉大な神話学者であったジョーゼフ・キヤンベルは

**神話は真実の一步手前である。**  
といっています。この場合の神話は単なるおとぎ話というのではなくて、人生の真実を表現しようとする物語の意味です」

B 「一步手前というのは」

D 「こうした物語とか神話というのは人生の真実を表わし示す文学的表現であるとともに真実へと人を導く力をもっています。それで一步手前といわれるのでしよう。真実そのものではないが真実にきわめて近く、真実と裏表になつているようなものという意味だと思います」

B 「そうすると私たちは法蔵菩薩の物語によつて、仏のまこと、まごころにふれるのですね」

\*

D 「実際、長い人間の歴史の中で無数の人たちがこの物語にふ

れて次々と阿弥陀仏のお心に感動して救われていきました。現在もこの物語は人々を救いつつあります」

B 「はるか昔の人たちもこの物語に救われ、現在の私たちもこの物語で救われるのです」

D 「ええそうです。ですからこの物語は真実であることが証明されているのです。もしこの物語が一人も人を救うことができなかつたのなら、単なるおとぎ話か勝手な作話でしかありません。救いの歴史は法蔵菩薩の物語の真実性をあかししてきたのです。ですからいつまでたつてもこの物語は色あせないのです」

B 「なるほど、この物語の内容は真実だから人をかぎりなく救い得るのです」

D 「そうです。たとえば、ある事柄が歴史的史実であっても、その史実を聞いて人びとが救われることはほとんどありません。歴史上のさまざまな事件や出来事は事実であっても、それを知つたことによつてその人が永遠の光を人生に見いだしたというようなことは殆ど聴いたことがありません。たとえば頼朝が鎌倉幕府を開いたという史実を知つたからといって人が救われるわけではありません」

B 「しかし、イエスキリストの生涯は人々を救ってきたのではありませんか」

D 「イエスの話が多くの人々を救ってきたことは事実です。た

だイエスキリストの出来事、いわゆる処女マリアから誕生し、さまざまな奇跡を行い、十字架上で殺され、三日目によみがえつたという話を歴史的史実といえるかどうかは大いに疑問です。あれは何らかのイエスの史実を題材に信仰的に創作した物語といつた方がいいと思います」

B 「法蔵菩薩の説話は真実から現れて真実を示し、私たちに真実を与え続ける、そういう歴史を貫いて働き続ける説話なのです」

D 「そうです。もともと世界に真実が働き続けている。すなわち色も形もない法身仏がまします。その法身仏は限りない智慧と慈悲の徳を内包している。一方私たちは真実を見失つて、罪業深重の身となり、流転をくり返しています。そうした私たちに法身仏が働きかけて、私どもを同じ真実にあずからしめようと方便法身の救済仏として、自らの徳用を表し示されてくる。その姿が法蔵菩薩です」

B 「私たちは法蔵菩薩の願行のご苦労によつて仏にしていただけなのです」

D 「そうなのです。ですから法蔵菩薩の願行は、もともと真実がないところに真実を作り出すのではなくて、もともとある真実がその徳を顕し出してきたものなのです。それで法蔵菩薩の修行は莊嚴行といわれます」

\*

D 「そうなのです。無いものから作つたのなら壊れる可能性がありますが、もともとあり続けている永遠なる真実から現れたのですから壊れないのです。はじめに無上の徳ある真実があればこそ、そこから現れた法蔵菩薩の願行も真実なのであり確実なのであり信頼するに足るのです」

B 「莊嚴行とは」

D 「莊嚴とはおかざりといいますが、たとえば御内仏のおかざりをする、そうすると仏様のありがたさが私たちに現れてきます。もし阿弥陀仏の絵像が白壁に掛かっているだけではあまりありがたいとは思えません。そうなる」と阿弥陀仏の徳が表れま

せん。金箔で装飾し、彫刻を彫り、花を供え、ローソクを灯すことによつて、阿弥陀仏のありがたさが表されてきます。あるいはこうもいわれています。ダイヤモンドの鉱石はそれを磨くことが外に現れる。法身仏という仏の鉱石を磨くことによつて仏の徳が現れる。その磨くのを莊嚴行だといわれています。そのように法蔵菩薩はもともとある法身仏の功德を私たちに現し与えてくださったのです。それが法蔵の莊嚴行だとお聞きしています」

B 「無いものからあるものを作るのではなくて、もともとあるものを現し与えてくださるのです」

D 「そうです。無いものから作つたのなら壊れる可能性がありますが、もともとあり続けている永遠なる真実から現れたのですから壊れないのです。はじめに無上の徳ある真実があればこそ、そこから現れた法蔵菩薩の願行も真実なのであり確実なのであり信頼するに足るのです」

# 歎異抄 第十六章第二講

信心さだまりなば、往生は、弥陀に、はからわれまいらせてすることなれば、わがはからいなるべからず。わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば、自然のことわりにて、柔和忍辱のころもいにくべし。(歎異抄第十六章より)

現代語訳(信心が定まったならば、浄土には阿弥陀仏のおはからいによって往生させていただくのですから、わたしのはからいによるはずがないのです。自分がどれほど悪くても、かえってますます本願のはたらきの尊さを思わせていただくなら、その本願のはたらきを受けておのずと、安らかに落ちついた心もおこるでしょう。)

私の「往生は、弥陀に、はからわれまいらせてする」これが信心の内容です。このひとことを聞き定めたのが信心であり、このひとことに定まらないのが疑いです。定まらないから、往生はいつまでも不定となるのです。阿弥陀仏は私の往生を全面的に引き受けたまい、成就して下さるのです。南無阿弥陀仏のみ名はそのことを私に告げ知らせて下さるのです。ナムアマミダブツ・ナムアマミダブツと喚びかけ、「我汝を間違ひなく浄土に生まれしめん」と仰せくださっているのです。

このことを知らないから、あるいは「本当だろうか」と疑うから、阿弥陀仏の本

願の功德が私の功德にならないのです。阿弥陀仏の功德が私において活性化しないのです。丁度それは、太陽は万人を照らしているけれども、目をふさいでいる人は陽光の恵みを享受できないようなものです。それは太陽のせいではなくて私たちのせいです。目を開けば陽光の恩恵にあずかるようなものです。

信心が定まるとは「往生は阿弥陀仏のはからいでさせていただく」ということを受け入れていることです。

聖人は最晩年のお手紙の中で、**如来の御はからいにて往生するよし、ひとびともうされ候いける、すこしもたがわず候うなり。**

と実に簡単に仰せになっていきます。(阿弥陀仏のおはからいで往生するのである)と人々がおっしゃっている、その通りですと仰せられているのです。「阿弥陀様が助けて下さる」と信じているのですから「わがはからいなるべからず」で、私の方の計らいはチリばかりもいらぬのです。

どうもこうもないのです。全面的に、まるまる阿弥陀仏に引き受けてもらわねば助からぬ我が身なのです。何一つ私の側からのものは間に合わないのです。私の自覚も、私のつかんだ信心も、私の称える念仏も、私の懺悔も、私の感謝も、私の覚悟も、私の道心も、私の善行も、私の道徳も、私の思索も、私の知識も、私の思想も、習った仏教学も真宗学も、何一つ助かるタネにはなりません。まったく無知無能、ただ虚無の中に落ちて行く、それが私のアリノママノ姿です。その私に聖人は「如来の御はからいにて往生するのである」と仰せくださり、

「弥陀に助けられよ」と仰せくださるのです。なんとという単純にしてなんとという大悲でありましょうか。蓮如上人もいつも「弥陀をタノメ」と仰せくださいます。なぜなら、阿弥陀仏は永遠に、今ここに「私が汝を助ける。心配するな」と仰せくださり「我をタノメ」と仰せくださっているからです。その仰せが今称える念仏の仰せです。

次に「わろからんにつけても、いよいよ願力をあおぎまいらせば」とあります。自分の行いの悪さ、煩惱の心の起こるにつけ、自分を浄化することは自分には不可能と知らされた者は、ただもう「阿弥陀仏の願力のみが私を浄化して下さる」と仰ぐほかないのであります。腹が立つにつけても、またその腹立ちを止めることができないにつけても、欲が起るにつけても、欲を離れることができないにつけても、いよいよナムアマミダブツ・ナムアマミダブツと念仏を申すほかないのであり、「ただ憑むべきは弥陀如来なり」と弥陀願力を憑むばかりであります。

弥陀大悲の願力を仰ぐ。仏の大悲の光は我が胸に流れて、「自然のことわりにて」おのずから、「柔和忍辱のころもいにくべし」で、煩惱によってこわばった心が柔和忍辱の心ともなつてくださる。とげとげしい私の心がやわらぎ、苦しみや不如意のことにあつても、それに随順し、受け入れるゆとりともなつて下さる。まことに如来の柔和忍辱の心が届いて、業煩惱いっぱいの中で働いて下さる。この如来の清浄心が働いて下さるほかに私の心が浄化される可能性はないのであります。

人から責められた時は腹が立つけれども、「責められても仕方ない我」と知らされる。責められて相手を責める心も起るけれども、我とともにいたまい、我を受け入れてくださっている如来様ましませば、相手を責める心も和らいでいく。

人間関係をどうすればいいか。これは今日の人の非常に關心ある問題です。この問題について、カウンセラーや有識者が多くのアドバイスや方策を論じていますが、しかし、凡夫の心は煩惱的自我が根になっていきますから、なかなかそういう結構なお話のようにはいかないのです。反省やら心がけやら技法やら対処やらは、一時的に間に合つても、すぐに本の自分に戻ってしまうのは、もともと煩惱的自我心が心の中心にドンと座っているからです。ですから自分の工夫で人間関係における問題を解決しようとすることは大変難しいことになるのです。ところで今この歎異抄にいわれていることは、自分の心で柔和になり、不都合なことに自分の辛抱心で堪え忍ぶことを説かれず、「わろからんにつけても」弥陀の大悲の願力を仰ぎなさいとおすめくださるのです。そうすると如来の柔和忍辱の心が我が煩惱的自我のかたくな心に浸透して、ようよう私のとげとげしい心も和らいでくるのであり、現実を受け入れていくようになってくるのです。要は、弥陀を仰いでそのつど念仏申す生活は人間関係をも「あるべき」方向にだんだんと歩ませて下さるのであります。